

私の幼児教育論

畠 瀬 直 子

“幼児教育論”といえるものを私はまだ持っていない。いや、当分持ちたくもない。だからといって幼児教育を考えないと誤解されては困る。日夜、このテーマは脳裏から去ったことはないのだ。ただ、私は幼児がひとかたまりの粘土をあくことなく作り変えることを楽しむように、考えたりまとめたりするプロセスが好きなのである。思いもよらない発見に感激して、それまでの考え方を修正したりする瞬間は、無上の喜びを感じる。これでは一生かかっても幼児教育論は出来ないかも知れないが、それでいいと思う。激変する社会を生き、硬化した思考の持主の机上論を聞きすぎて、自分の思考を『論』

としてまとめることに用心深くなってしまったのだから。

さて、懐しい母校に事務局を置く教育誌からの依頼は、ことわりたいたいという気持をみじんも起こさせなかった。依頼状を読み終った途端、考えをまとめる方向で頭が動き始めた。こんなことは初めてである。

私が考えをまとめるのに影響しているのは、三つの視点であろう。第一は、母親としての経験である。臨床心理学を専攻したのは、女性心理学者が一番生き生きと才能を発揮している分野だったからだ。それほどに強い願いを持って大学院進学を決めた。子供を育てるある時

期、その願いは悲願に終りそうに見えた。子供はそれほどに大きい存在だった。この体験ぬきには、幼児の教育を語れない。第二は、臨床心理学の視点である。人間

を、時間的流れの中で捉える視点である。私は、幼児を、学童期・思春期・青年期そして成人期という流れの中で見つめる。そうすると、幼児の未熟な部分も、不完全な部分も、そのままに重要な意味を帯びてくる。第三は、C・R・ロジャースのもとで学んだ経験である。私は、物ごころついた時には、大学に進む筈の子供として育てられていた。父と母は、よく学生時代の話をしてきた。その中心は、恩師との交流であった。大学生生活のイメージは「師との出会い」として私の中に定着していた。これが後年私を悩ませた。幼いイメージで創り上げたものがあまりに大きかったのだ。そして、人間に過大な期待をする自分が愚かだとの結論に達しかけていた。人間に対する夢を簡単に捨てるほうが誤っていることを気付かせてくれたのが、ロジャースである。私はついに師にめぐり合ったのだった。彼に、あらゆる人間の中に

夢を見つける力も育ててもらった。

★コペルニクスの転回を始める時

私の子育ては、こんな風に始まった。息子が生れて百日目、父はお祝いに美しく焼きあげられた鯛を持って現れ、こう云った。

「直子、お前は親孝行などというものは一切なくてよい。その代り、子供を粗末にしないでくれ。大切に育ててくれ。」

それは、研究者としてのスタートを切ろうとしていた私が、子育て重視に大きく針路変更する重みを持ったひとことだった。しばらく考える時を経て、総力をあげ心をこめて息子を育てる決心ができた。

だが、幼児として集団生活を始めた彼は、終始なさない思いを私にぶつけてきた。「お約束守って仲よく遊ぼうと思うのに、みんな守らないの」「金魚のヒレは七まいあるのに、『わー、はたせアホやな、そんなにいるもんか』って云うの。ボク、くやしい!」「赤ずきんち

やんがオオカミに食べられるところがいやなの。それなのに、みんな大好きで、その紙芝居ばかりしてっというの」

心をこめて育てられた子供なんて、集団にはいると情ないものである。子供の安らかな寝顔を見つめて、「心のやさしい子供に育ててごめんね」とつぶやく日が続いた。それでも彼が経つつある体験は貴重なものであり、どんなにつらくとも彼自身が生きぬかねばならないと考えた。もちろん、こっけいな努力も随分した。あるとき夫がひとりしていると、近所の子供が訪ねてきたのだそうだ。「保育園に行ってるよ。」「ううん。おぼちゃんいる？」アメリカ帰りの息子を子供の世界にとけこませようとする努力は、珍奇な結果を招いた。

たとえどんな素晴らしい環境で育てられようと、家庭でどんなに生き生きしていようと、集団生活は子供が乗り越えねばならない壁を提示してくれる。十人の子供に十様の壁を。その中で、子供達は世界は自分を中心にしては回転していないことを少しずつ知っていく。

コペルニクスが地動説をとなえた時のように、これは衝撃的な出来ごとである。我が子を中心に世界がまわっていないことを、親も認めていく必要があるからだ。しばしば、「子供を守る」というスローガンが、天動説を堅持することにすり変ってしまう。幼児を見守る先生方は、我が子を中心に世界がまわってほしいという親の願いと闘う毎日なのではないだろうか？ だが、地動説が正しいのである。あがきながら、現実を認め・現実を愛し、現実を改善することに喜びを感じる芽は育つ。その芽を、育ててほしい。家庭では決して得られない不思議な力を持つ場が、集団教育の場なのだから。

トンチンカンなインテリママの努力で子供を苦労させてしまったが、三年生頃になると少年らしい輝きを見せ始めた。ママのもとで得た良さも見えはじめた。一方、私は情ない気持で過すなかで、たくさんのお母さん達と触れ合うことができた。それは得がたい経験であった。

★ほゝえみをひき出す可愛い時

「ナカムラ行ってくる。」インチキ菓子売っている駄菓子屋へお兄ちゃんが駆け出した。「アタチもナカムラさに行ってくる。」二才の妹が後を追った。そして、姿を消してしまった。あんな驚いたことはない。動転して捜しまわった結果、おむかいにいた。おむかいは中村さんである。

子供時代、フロッキーという名前の犬を飼っていた。

犬を散歩させていると、ススム君がこう云った。「なおお姉ちゃん。この犬、コロケケやな。」

幼児は、存在そのものがユーモラスで可愛い。接する人々にパッと明るさをとます。これは、知恵遅れの子供でも、自閉症の子供でも、心を閉ざした子供でも変りはない。口を固く閉ざした子供を相手に、私は大笑いしたことがある。子供を相手にゲラゲラ笑っていると、彼等は調子づいて生き生きする。単純化すると、子供を相手に笑っているだけで、子供は伸びていく。自分の存在がおとなに喜びを与えていることを実感して、成長へのはずみがつくのだ。だから、表情の乏しいまじめそうな教

師を見かけると心配になる。もしも、子供と接しても心の底に笑いが起こらないようなら、カウンセリングを受けるのがいいかも知れない。

つい先日、哲学に深くひかれて現実を歩むことが空しくなってしまった青年と語った。私には、人間の幸せを追求する哲学が現実逃避に役立っている謎がなかなか解けなかった。だが、高校時代に両親の不和を眺めながら、「人間とは」「自分が今ある意味とは」を考えて哲学にひかれ始めたと聞いてハッとした。自己の存在が両親の喜びと笑いを引き起こしてこなかった長い間の悲しみを思った。

幼児達は、すでに様々の問題をかかえて教師のもとにやってくる。頭がいたくなるような子供もまじっている。けれども、幼児の段階ではどの子も一樣にユーモラスで可愛い。その存在を喜ばしく感じさせる力を失ってはいない。その力が消失しないよう大切にし、出来ることなら大きく育て、学童期へ手渡してやりたい。

★悠久の時間をもつのんびりした時代

息子が五年生の時である。「お母さん、僕は生れてから今まで一〇〇年生きたような気がする。そして、大人になるまで一〇〇年あるような気がする。大人になってから死ぬまでもう一〇〇年あるように思う。」そろそろ塾に通う子供が増えはじめる年齢になっても、彼はおっとりかまえていた。

彼の理論をかりると、幼児が大人になるには、ほど二〇〇年という悠久の時を持つことになる、ところが、私達の時間が何と短いことか！「最近の私は一年さえもが短くなってきた。ここに、大人と子供の大きな断絶が生じる。私達のあわただしい時間を子供に押しつけて、彼らを心理的にみた時間で一〇〇年間も追いまわし、精神的にへとへとなティーン・エイジャーにしてしまうのだ。これに対しては教師も責任がある。

きちんとトイレに行かせて下さい／持物を整理できない子供がいます／忘れ物が多いです／一日一時間は家庭

学習させましょう。何とたくさんの注文を聞いたことか。もちろんそれは小学生に対してであるが、それを身につけた小学生にしようとする幼児教育の場も忙しくなってくる。教師の発言を正面から受けとめる誠実な母親に育てられた子供は、一様に萎縮している。若いお母さん達の誠実さを、もっと違った形で花開かせることだってできるのに！

一億総神経症か反抗児にしてしまうような我々の基本姿勢に対して、私の中で何かが「違う！違う！」と叫んでいた。当時よく冗談をとばしていた。「幼稚園に入園してしまえば、子供がおしっこをしくじろうが、帰りたいと泣こうが、もうこっちのものよ。」これを聞いたお母さん達のホッとした表情は、本当にやわらかで美しくかった。「先生には悪いけど、忘れものしないようになって心配しないの。恥しい思いをすることは葉だと思うの。」朝長々とトイレに入り、神経質そうな兆をみせた息子や娘には、「本当は、行きたいときに行くのがいいのよ。無理しなさんな、そのために学校にはトイレがいっぱい

あるのよ」と励ました。

現在、おならのことが気になったり、腸の工合が気になつたり、様々の症状で苦しんでいる若者が多い。神さまが作ったとしか云えない様なすばらしい体を与えられているのに、自分の体を信頼できず、意志の力でコントロールしようとして、不安定にゆらいでいるのだ。

成長しつつある自分を感じることは楽しいことである。生命を守り育てることは喜びに満ちた光栄ある仕事である。悠久の時を、私達も楽しみたい。

★自分の小ささを知る時

中学生になった息子と何度語りあった事だろう。「荒れている中学生の未来を、明るくする手だてはないか？」を。公立中学で学ぶ彼は、多発する問題のまっただ中にいる。中学生の口からしか聞けない生々しい話をいっぱい語ってくれる。パーマをかけ真赤なジャンパーを着た連中と釣に行き、時には母子家庭の級友の新聞配達を手伝う息子。模擬試験の前日は、勉強をつき合ったりもす

る。「親がカウンセラーなんかしてると似てくんのよ」と云われては、苦笑するしかない。「お母さん、どうしようもないな。そういうヤツは、自分は親よりえらい、進んでいると思っているな。先生を完全に馬鹿にしているな。」

現在の問題をまぜ合せてくる問題点は『肥満した自我』を持つおびただし数の子供達である。小遣いを節約している父、内職をして努力する母の心を思いやれない子供達。我々は、子供をいつくしみながら犯した誤りを改善していかねばならない。その手がかりは、やっぱり幼児期にある。

幼児は、親の保護なしには生きていけない。過保護にさえしなければ、自分の頼りなさをいやというほど思い知る毎日である。パパの手の大きさにホッと、ママの膝のぬくもりに安堵する。先生が言ってくれた一言が、飛び上るほど嬉しい。これぬきに、健全な自我の形成はないのである。

人の助けを必要とするチツポケな自分。これを身にし

みて知るところから、人格形成が始まるのである。

★ドンキホーテの意欲を得る時

まだティーンエイジャーなのに、深く挫折した子供、彼らと出会ったショックは、一生、私の心に傷跡を残すだろう。その経験から、いま大人が子供に与えてやらねばならないものは、生へのパッションではないかと考えている。ドンキホーテのようなあの意欲だ。

石油資源は無尽蔵等と教えられた知識は、役立たなかった。この国で身につけた常識の半分は、アメリカでは役立たなかった。あどけない表情を浮べた子供達は、我々以上に変化の波をくぐっていかねばならない。戦争せずにもめぐりに決着をつけるといふ難題も克服していかねばならない。幾度傷つき矢折れることだろう。だけれど、ドンキホーテのような意欲で乗り越えてもらいたい。そのためのエネルギーを、今からためていってほしい。

「お母さん、気持よかったわー。全員がシーンとして試

験受けてた。悪いヤツも、高校には行きたいんやな。」
中学三年の中間試験を迎えて、子供達はひきしまつてきたらしい。悪いと言われる中学生が、ひとり残らず未来を捨てていないことを知って、本当に嬉しかった。子供
の人生は、子供自身の手で渡してやるう”こう考えて親としての歩みを進めてきたが、社会批判しだした彼に、受験体制に背を向けるのではないかと恐れていた。だがそれは危惧にすぎなかった。息子は、仲間達と足並をそろえて、日本に住むかぎり当分出合わねばならない難題に向いつつある。

五年生の娘は、楽しい計画で忙しい。ただし、昨日ノートをのぞいたら、計算練習二〇題のうち、まるがついているのはたった五題だった。それでも、友達と飛び歩く意欲は何ものにもかえがたい。子供時代を思い出す。小学生は遊びほうけていたことを。今の子供ほどかしこくなかったが、生への意欲に充たされていたことを。

さて、あなたの園は、小さなドンキホーテで満ちていますか？